明日への一歩 —20—

休刊の危機に特別号 ●●● タウン誌編集者

創業者の思いを胸に

「みやこわが町」特別号を発行した横田あきらさん（手前）と橋本久夫さん。「宮古の惨状を後世に残したい」との一心で、奮闘する＝宮古市松山・タウン情報社

東日本大震災で休刊の危機に直面した宮古市の月刊タウン情報誌「みやこわが町」。「宮古の惨状を後世に伝える」―。2人の編集者と創業者の思いが重なり、特別号の発行につながった。

同市松山のタウン情報社。代表の橋本久夫さん(56)＝同市磯鶏西＝と、横田あきらさん(53)＝同市崎鍬ケ崎＝は、増刷したばかりの特別号の発送、配達に奮闘する。

同誌は、2人が取材から編集、配達、集金、営業をこなし、毎月10日にB5判、60ページを発行。身近な話題を掘り下げ、市民のなじみも深い。3月号を発行した翌日、震災に遭った。

大津波によって、あまりにも変わり果てた郷土。取材、配達、集金はおろか、多くのスポンサーが被災し、休刊の危機に陥った。景気低迷によって、厳しい経営が続いていた中での震災。横田さんは「これも一つの区切り。もう潮時かなと思った」と振り返る。

日ごとに変化

同誌は1977年創刊。創業者の故・駒井雅三さんは市内で印刷会社を経営する傍ら、写真家、報道記者、歌人として幅広く活動した文化人だった。

1933（昭和8）年の昭和三陸大津波で被災した翌日、宮古から船で旧田老村（現・宮古市田老）に入り、村の惨状を数百枚の写真に残したことでも知られる。

「田老村　廃墟（はいきょ）の浜に立つ　われの　視野何一つ　生ける　いろなし」

「屍（しかばね）を　積みて焼く火に　ざし持ち　新聞原稿　こよい　もつづる」

78年前、駒井さんが田老の惨状を詠んだ歌だ。

がれき撤去が進み、日ごとに変わっていく宮古の姿。2人は「必死の思いで被災地を記録した先代社長に報いるためにも、この惨状を後世に残すのが、われわれの役目ではないか」と決意した。

お金もらわず

今月20日、特別号の発行にこぎ着けた。紙とインク不足で通常より少ない48ページながら、自分たちで撮影した被災地の写真のほか、市職員や市民から提供された写真を多用。津波が襲来したとみられる午後3時26分で止まったまま、がれきに埋もれる柱時計の写真を表紙に使った。

スポンサーの広告もできる限り掲載した。社長らが亡くなった海沿いのレストラン、壊滅した地元酒造店、「もう店は続けられない」と話す商店…。廃業の危機に直面している企業や店の広告も「長年お付き合いいただいた。せめて敬意を表したい」と、お金はもらわず名前だけを掲載した。

当初は1600部を発行し、即日完売。今月末に5千部を緊急増刷し、全国から注文が殺到した。市民から「貴重な記録を残してもらい、感謝している」との声も寄せられている。

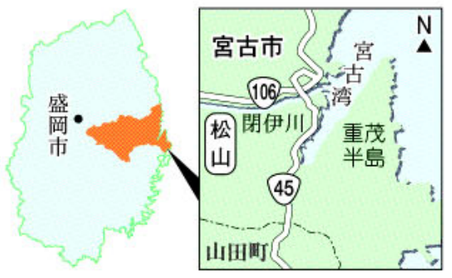
「この記録された現実を受け止めながら、明日への希望を持って立ち上がる復興に向けての一冊になればと願っている」

同誌編集部は特別号の発行に際し、巻頭言で呼び掛けた。今後の発行継続はまだ不透明だ。しかし、多くの市民が、みやこわが町の完全復活を願っている。

◇　◇

同社は連休明けの5月9日からインターネットで販売を再開する予定。税込み500円。アドレスはhttp://www.miyakoben.com

（文、写真・菅原智広）



普通の生活積み重ねて

宮古市の女性グループ「昭和通りのおかみさんもてなしたい」メンバー
松原安子さん(63)

被災した市民を勇気づけようと、県外から届いた花を使ってボランティアと一緒にハンギングバスケットやプランターを作り配布する活動を続けている。

先日、プランターの前に立ち止まり、じっと花を眺めていた女性と話をした。その女性は「震災後、生きていることがずっと不思議だったが、花を見てここは平和なんだと初めて思った。やっと救われた」と話していた。

花も「みやこわが町」も同じ。今まで普通にやってきたことを少しずつ積み重ねていけば、きっと立ち上がれる。「みやこわが町」を見れば宮古が分かる。絶対、なくしてほしくない。

いわて　東日本大震災

取り戻せ「野球勘」

大船渡・末崎スポ少 矢巾で練習試合

大船渡市の末崎野球スポーツ少年団は29日、矢巾町南矢幅の県立産業技術短期大学校グラウンドで、同町の矢巾アローズと練習試合を行った。昨年の県大会を制して全国大会に出場するなど強豪として各チームからライバル視される末崎スポ少だが、大震災の影響で練習不足気味。「勝負勘」を取り戻そうと元気にプレーし、友情を築いたアローズと再戦を誓い合った。

末崎スポ少は末崎小校庭に仮設住宅が建設中で、室内練習場はあるが十分に練習できない状況。この日は随所に好プレーもあり、ヒットがあと1本出れば同点に追い付く場面もあったが、2試合ともアローズに敗れた。

両チームは昨秋の県新人大会準々決勝で対戦し末崎スポ少が勝利。今回は当初、大船渡市で対戦する予定だったが、震災を受けてアローズ側が招いた。

選手はアローズの父母会が用意したカレーライスを一緒に食べて、試合後は肩を組んで記念写真に納まった。末崎スポ少は同町内の温泉も楽しんだ。

アローズの増間成々世（なな）主将（煙山小6年）は「被災して大変かもしれないが練習を頑張ってほしい」とエール。末崎スポ少の佐藤啓太主将（末崎小6年）は「外で試合ができて気持ちがいい。今度は矢巾アローズに勝ちたい」と県大会での勝利を誓った。

肩を組んで写真に納まる末崎野球スポ少と矢巾アローズの選手＝矢巾町

ソフトテニス 思いっきり

盛岡で復興支援練習会

県ソフトテニス連盟・練習会」を開いた。（新沼正博会長）は29日、盛岡市みたけの県営運動公園で「負けるもんか！岩手復興支援ソフトテニス講習会」を開いた。学校が避難所になっているなど部活動が思うようにできない被災地の中学生も参加。広いコートで思いっきり練習に励み、交流を深めた。

大船渡市や宮古市、釜石市の中学生を含め、県内の小中高生ら約200人が参加。同連盟のスタッフや陸前高田市ソフトテニス協会の菅野勝郎会長(63)が指導に当たり、選手たちはストロークなど基本プレーを学んだ。

大船渡市の大船渡中で避難生活を送る同校2年菊池拓人君は「ボールを打つのは気分転換になる。部活が一番楽しいし、みんなと広いコートで練習できてうれしい」と声を弾ませた。

同連盟は復興支援として、今後も沿岸部から子どもを招いての練習会や、被災地での指導を行う予定だ。

広いコートで思いっきり練習に励む大船渡中の生徒＝盛岡市・県営運動公園

沿岸園児の創作 こいのぼり掲揚

イオン盛岡南

盛岡市本宮のイオン盛岡南ショッピングセンターは29日、1階のセンターコートで、東日本大震災で被災した宮古市と釜石市などの幼稚園児らが作ったこいのぼりを掲げた。

1匹の長さ約4メートルのこいのぼりは、手形や似顔絵、人が手をつないでいる絵などが描かれ、それぞれに「みんなでがんばろう」などとメッセージが書かれている。

イオン盛岡南ショッピングセンターに飾られた個性豊かなこいのぼり

盛岡市の園児らが「こいのぼり」を合唱し、計31施設から寄せられた40匹を掲揚。津志田保育園の米沢歓徒（かんと）ちゃん(4)は「絵の具で手形を付けてこいのぼりを作った。楽しかった」と見上げた。

こいのぼりは5月8日まで同店に飾られる。

～被災地からのメッセージ～

津波てんでんこ

題字・山下文男さん

体育の授業が楽しみ

釜石市大渡町の釜石小で避難生活
岩間　流輝（るき）君
（釜石小3年）
1歳の妹はお母さん

の実家に避難している。今はお父さんと2人だけれど寂しくはない。支援物資で大好きなアニメが届けられたのでうれしい。学校が始まって給食と体育の授業が楽しみ。

自分の家に戻りたい

大船渡市の母親の実家で避難生活
佐々木　穂波さん
（広田小1年）

大事な物が全部流されてしまった。早く自分の家に戻りたい。地震のために友達2人が引っ越したのでとても寂しい。でも小学校はとても楽しく、国語の勉強が大好きです。

厳しい避難所の生活

宮古市の津軽石小で避難生活
元教員
若狭　健夫さん(67)

天命なのか教員としての初任地は津軽石小で、最後は津軽石小だった。最後の勤務校での避難生活も厳しいことばかりだ。夜は冷えるし、他人に気兼ねすることは多い。早く大好きな温泉に行ってゆっくり漬かりたい。

～被災地へのメッセージ～

音楽で役に立ちたい

矢巾町南矢幅
飲食店経営
長谷川久美子さん(37)
紫波町の古館ふれあいホールで復興支援チャリティーライブに出演した。被災地を助けたいという思いの人で会場が満席になり、涙が出そうになった。自分たちの音楽が役に立ちうれしい。ライブはまた開催したい。

育った町へ支援継続

軽米町軽米
軽米中教諭
菊池　陽介さん(27)
大槌町の実家が浸水の被害を受けた。育った町のために何かできないかと考え、勤務先のほか卒業生や地域の方に声を掛け、学生服や筆記用具などを集めて持っていった。離れているが、今後も支援を続けたい。

この紙面の著作権は岩手日報社が保持しています。無断転載、複製及び配布は禁止します。